

み
わ
き
よ
う
ど
か
み
し
ば
い

三和郷土紙芝居



もくじ
目次

一、お亀さま かめ

六、ハツ八月のかけすり鉢 やっやつき
ばち

二、鈴越し峠の狐さん すずこ
とうげ
きつね

七、御殿山のお姫さま ごてんざん
ひめ

三、狐のきらいな硫黄のにおい きつね
いおう

八、ベンズルさま

四、弁慶岩 べんけいいわ

九、かぶと泷 かぶと
たき

五、平木山の大蛇 ひらきやま
だいじや

十、樽ヶ山の弥勒さま たるがやま
みろく

か
め

お
亀
さ
ま

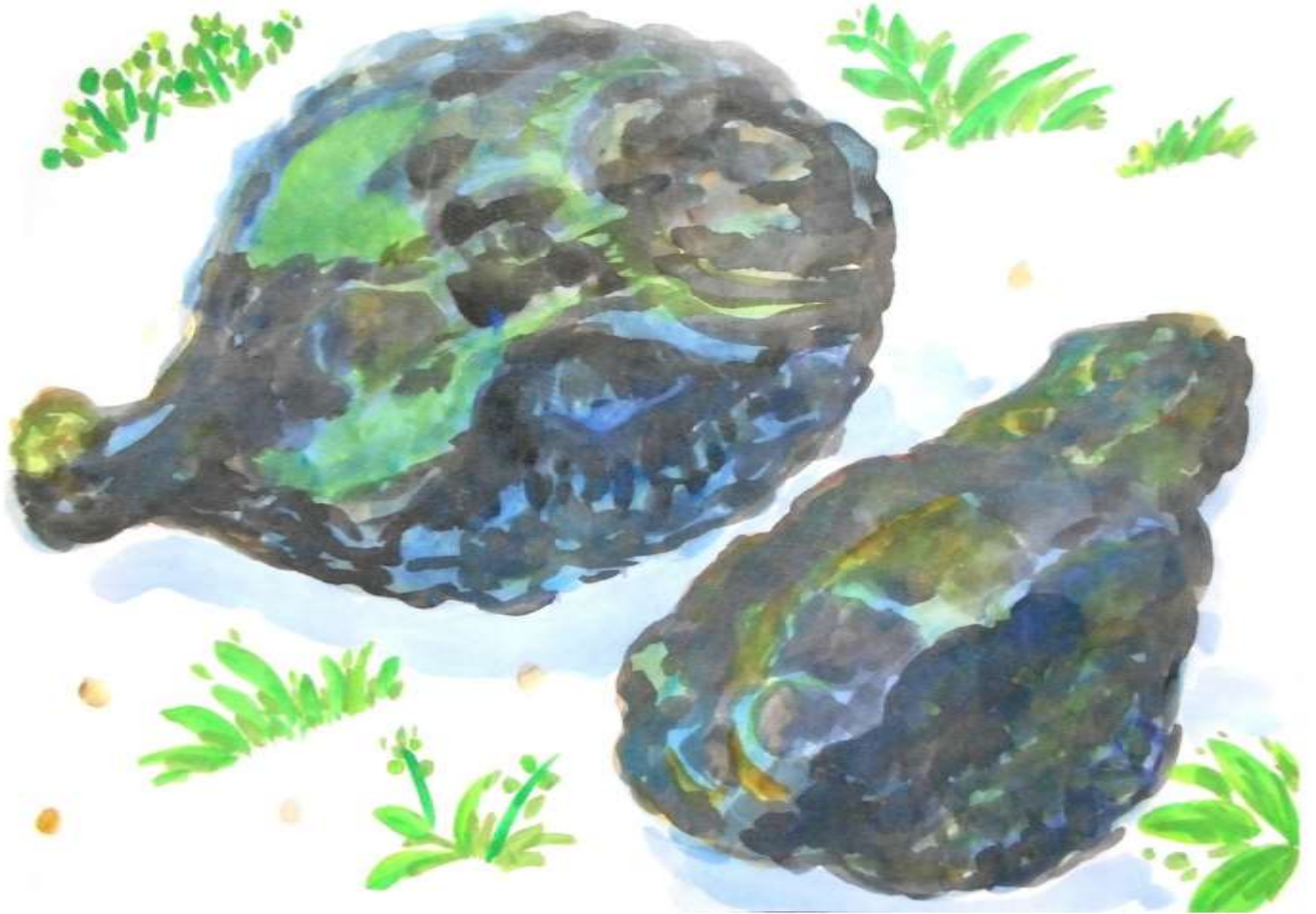




むかし、むかし、川浦の里に「タイコウ」という和尚
さんがおられた。

ある日のこと、和尚さんは、神坂を通過して川辺へ托鉢
に出かけなされた。途中、六本松の峠にさしかかられた
時、道の真ん中の人の行き来に邪魔になるところに黒い
石が転がっていた。

※托鉢…修行僧が、鉢を持って町中を歩き、人の家の
前に立って施しの米や金銭をうけて回る
こと。



和尚おしょうさんは、人が通るときにつまずいて、怪我けがでもし
てはいけないと思われ、その石を少し離れた邪魔じやまになら
ないところに移うつし替かえておかれた。

無事に、托鉢たくはつを終えての帰り、朝ほど通った六本松ろっぽんまつの
峠とうげにさしかかって、和尚おしょうさんはびっくり仰天ぎやうてん。

不思議ふしぎなことに、来るときに移しておいた黒い石が、
まるで呼吸こきゅうをしている生き物のように、朝あさのところに戻もど
っているではありませんか。



ひとこ
人っ子一人いない山道のこと、和尚さんは、恐る恐る
小さな声を震わせて

おしょう
和尚さん 「生あるものなら動いてみよ、

いものうご
生き物なら動いてみよ。」

と、石に向かって語りかけられた。すると、あら

ふしぎ
不思議、その石はあたかも返事をするように三回ほど

まわと
回って止まったそうなの。



和尚おしょうさんは、この石を神仏様のお告げの石ではないか
と思い、大事に持ち帰って観音堂に祀り、朝夕お参りを
されたとな。

この亀かめに似た石いしに願ねがい事ごとをかけてお参りすると、どん
な願ねがい事ごとでもかなえられ、患わずらっているところをこの石で
さすると必かならず病びよう氣きが治なおったりするといいうので、たいそ
う評ひよう判はんになり、誰だれ言いうとなく「お亀かめさま」といいう名なが
いたそうな。お供そなえ物ものをししたり、「お亀かめさまが寒さむかろう」と
敷しき物ものを敷しいたりして大だい事じにお参まいりするようになった
そうな。



これまたある時、この評判高い「お亀さま」を盗み出して、ひと儲けしようと考えた不届き者がおつてな。
盗んで逃げたが、一晩中、同じ所をぐるぐると回って
いただけやったとき。

※今、この「お亀さま」は、三和小学校の東側の山の斜面にある「おかめ庵」というお堂に、祀られているよ。
毎年、十月の「体育の日」に供養が行われているよ。

三和のむかし話

すずこしとらげ

きつね

鈴越峠の狐さん

きつね

ば

はなし

狐に化かされた話



むかし、むかし、三和の甘屋つづやから、富加とみかの加治田村かじたむらに嫁とっいだ、およしさんの娘むすめに、待ちまに待まった子どもが生まれた。およしさんは、たいそう喜よろこんで、娘むすめと初孫はつまごのために、餅もちと娘むすめの大好物だいこうぶつのおはぎを作り、重箱じゅうばこに詰つめて届けに行くことにした。

およしさんは、娘むすめのうちへと続つづく鈴越峠すずこしとつげへ急いそいで向むか
つたと。



さて、鈴越すずこしの山ぐろでは、重吉しげきちいさんが山の下刈したがりをせつせとしとつた。

およしさん 「ええ天気やなも、精せいがでますなも」

と、およしさんが話しかけた。

重吉しげきちいさん 「およしさん、今からそんな荷物にもつを持って

どこへいくんや」

およしさん 「嫁とついだ娘むすめに、やっと子どもが生まれた

もんで、お餅もちとおはぎを作つて見に行

くんや」

重吉しげきちいさん 「それはめでたいこつちやあ、鈴越すずこしの狐きつねは

利口りこうな奴やつやで、早はよ明あかるうちに山を

おりんと化ばかされてまうぞ。」

そうして、およしさんは、にこにこ足取あしどりも軽かるやかに山のぼを登のぼって行いつた。



重吉しげきちいさんは下刈したがりりを終おえて、腰こしをすえ、そして峠とつげ
の上を見てびっくりぎょうてん。ずっと前まえに登のぼって行いっ
たはずのおよしさんが、道端みちばたに落おちている馬糞まぐそを重箱じゅうばこ
につめていたのではないか。馬うまの糞ふんなんぞ重箱じゅうばこにつめて
どうするのかと思おっていると、大事だいじそうに風呂敷ふろしきに包つつん
で、また歩き出したのだ。重吉しげきちいさんは、狐きつねに化ばか
されてしまったと思おって、およしさんを追おいかけた。



峠を下った一軒家では、およしさんが風呂敷をほど

いて、重箱から馬糞のおはぎを3人の子どもたちと食

べようとしとった。重吉じいさんは戸口をドンドンとたたき

大きな声で、

重吉じいさん「おい、食うな！早よ捨てよ！

それは馬糞やぞ！

そんなもんは食えん！」

と必死に叫ぶが、およしさんと3人の子どもたちは、

にこにことおはぎを食べておったと。



そこへ若い衆がやって来た。誰もいない山小屋の前に
 立って何やら大声でどなっている重吉じいさんを見て

言った。

若い衆

「重吉じいさん、そんな所で何しと
 るんや？」

重吉じいさん「何しとるとはなんや！」

今、およしさんが重箱に詰めた馬糞を
 子どもんたに食べさせとるもんで、止め
 ようとしとるんや。

およしさんは、狐に化かされたんや！」

「何いっとるんや！よう見てみい！」

ここは、誰もいないただの山小屋やぞ、

じいさんが狐に化かされたんや！」

若い衆



その声こえに重吉しげきちじいさんは、「はっ」と我われに返かえった。

そこは、確たしかに誰だれもいない山小屋やまごやの入り口いぐちだった。

きつと利口りこうな鈴越すずこしの狐きつねさんは「しめしめ、化ばかして

やった!」と、長ながいしつぽをふりふり、笑わらって見ていた

ことだろう。

はなしは、これでおしまい。

三和のむかし話

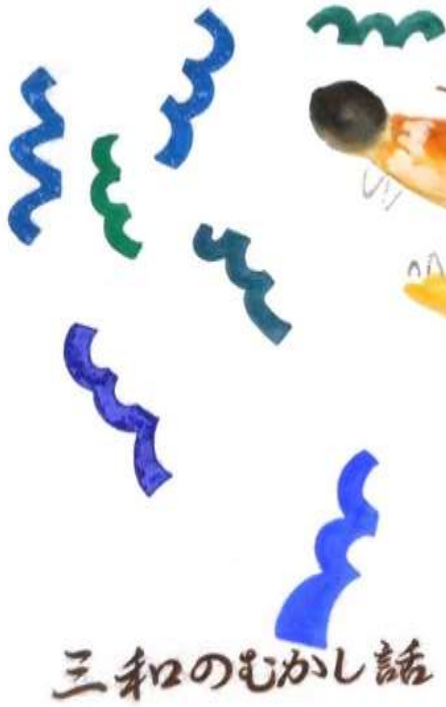
きつね

狐のきらいな

いおう

硫黄のにおい

狐のきらいな



硫黄のにおい

三和のむかし話

まだ、三和川浦の子どもたちが、川辺の学校へ通っていた頃のおはなしです。

その頃は今と違って食事は大変まずいもので、

麦ご飯に家で作った味噌や畑で取れた野菜の煮物を添

えて食事を済ませ、肉や魚などは一年に何回も食べるこ

とはありませんでした。

お祭り、お正月あるいはお盆など、何かご馳走を作

る時になると川辺町まで歩いて買物に行ったり、学校か

ら帰る子どもに買物を頼んだりして、用を済ませていた

ものです。



さて、ある朝、重吉は、お母さんから、買物を頼まれました。

お母さん 「重吉、今日の学校の帰りに「油揚げ」を

買ってきとくれ。」

重吉 「うん、ええよ。でも、地藏峠には

「油揚げ」が大好物の狐が住んどるで

なあ…。」

お母さん 「大丈夫やて、豆腐屋のおばあさんが、

「狐よけ」をちゃんとくれるで、安心して

行ってこやあ。」

重吉 「うん、ほんなら買ってくるわ。」

と言いました。



さて、その日の学校帰りに重吉は、川辺の天神裏の「ハ
ンネ」さんという豆腐屋さんにやってきました。

重吉 「おばあちゃん、「油揚げ」ちようだい！」

と言うと、

おばあさん 「アンヤは川浦の子か？」

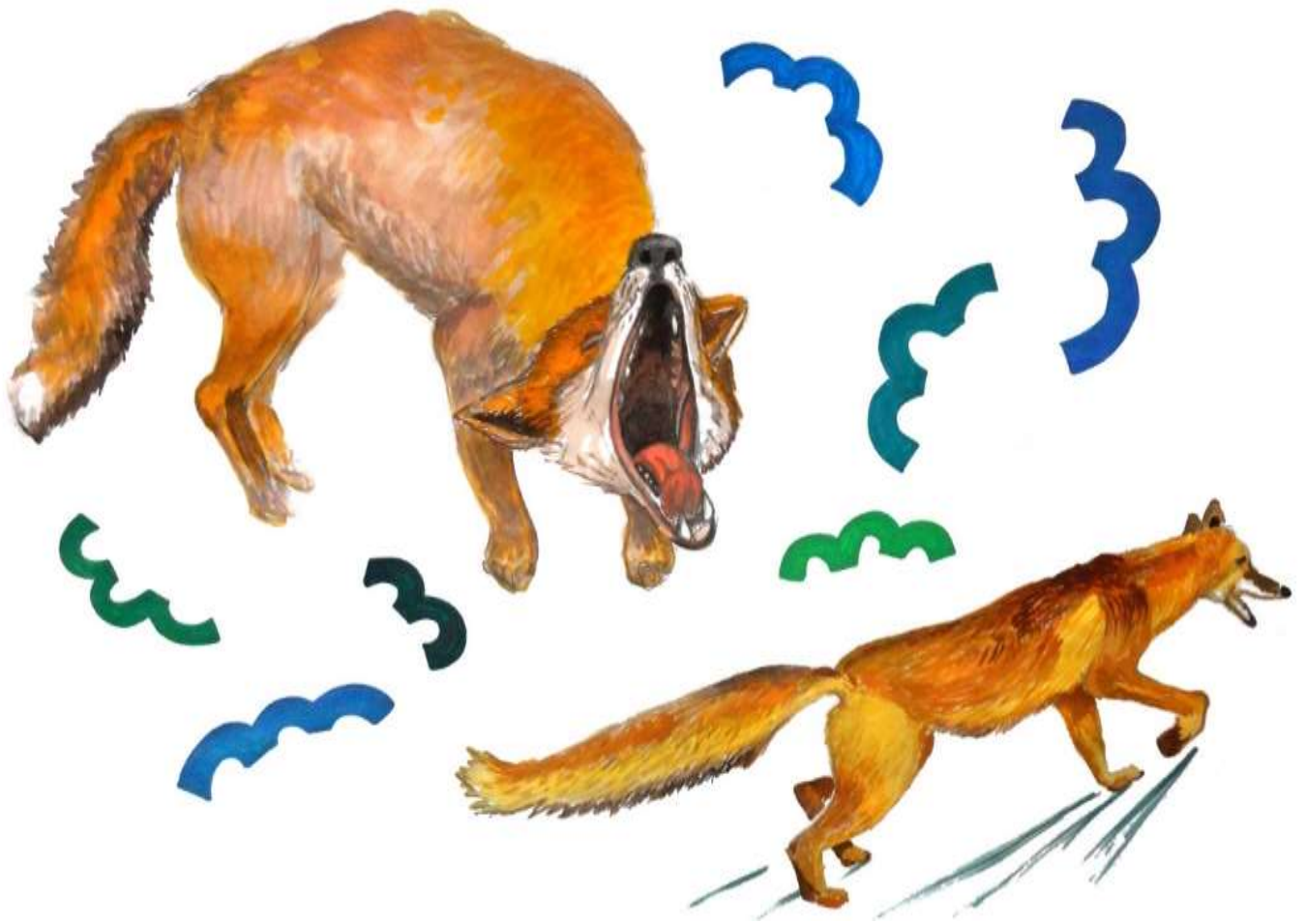
重吉 「ウン、そうや」と言うど、

おばあさん 「ほうか、ほんなら暗くならんうちに、

早よ帰らないかんよ。」

そうやって、「油揚げ」を藁づつに入れて新聞紙で包
み、その中に、硫黄の付いたマッチ代わりの「付け木」
を、そつと一枚入れてくれました。

地蔵峠にさしかかるころには、日が暮れてだんだん辺
りが暗くなってきました。重吉が、狐が出るのではない
かと、こわごわ家への道を急いでいると、好物の「油揚
げ」の匂いにつられて、狐がそつと近づいてきました。
けれど狐は、ギョツとして足を止めました。



「油揚げ」からは、大嫌いな硫黄のにおいもするの
です。狐は「油揚げ」は欲しくてたまらないけれど、
「油揚げ」をとることができません。狐はしぶしぶ逃
て行きました。豆腐屋のおばあさんは、狐は硫黄が嫌
な事をちゃんと知っていて「付け木」を入れてくれたの
です。

重吉はその後も何回となく「油揚げ」を買って帰った
ことがありましたが、一度も狐に取られたことはあり
ませんでした。でも、中には、「油揚げ」を取られた人
が何人もあったそうですよ？
おしまい。

「付け木」というのは木を薄くはいで縦五センチ、横十センチ位の大きさにして、その両端に青い硫黄が塗ってあり、「かまど」や「囲炉裏」で薪を燃す時に、「付け木」を半分位に裂いて火種につけると、「ツン」と硫黄のにおいがして、「パツ」と火がつくマッチのようなもので、ガスの無い時代には一番大切な品物でした。

おじいさんが子供の頃には付け木売りのおばあさんが、大きな紺風呂敷にいっぱい「付け木」を包み、背負って一軒一軒売って歩いたものです。どこの家でも一銭か二銭買うと一抱えくらいの「付け木」を売ってくれました。

べんけいいわ

弁慶山石

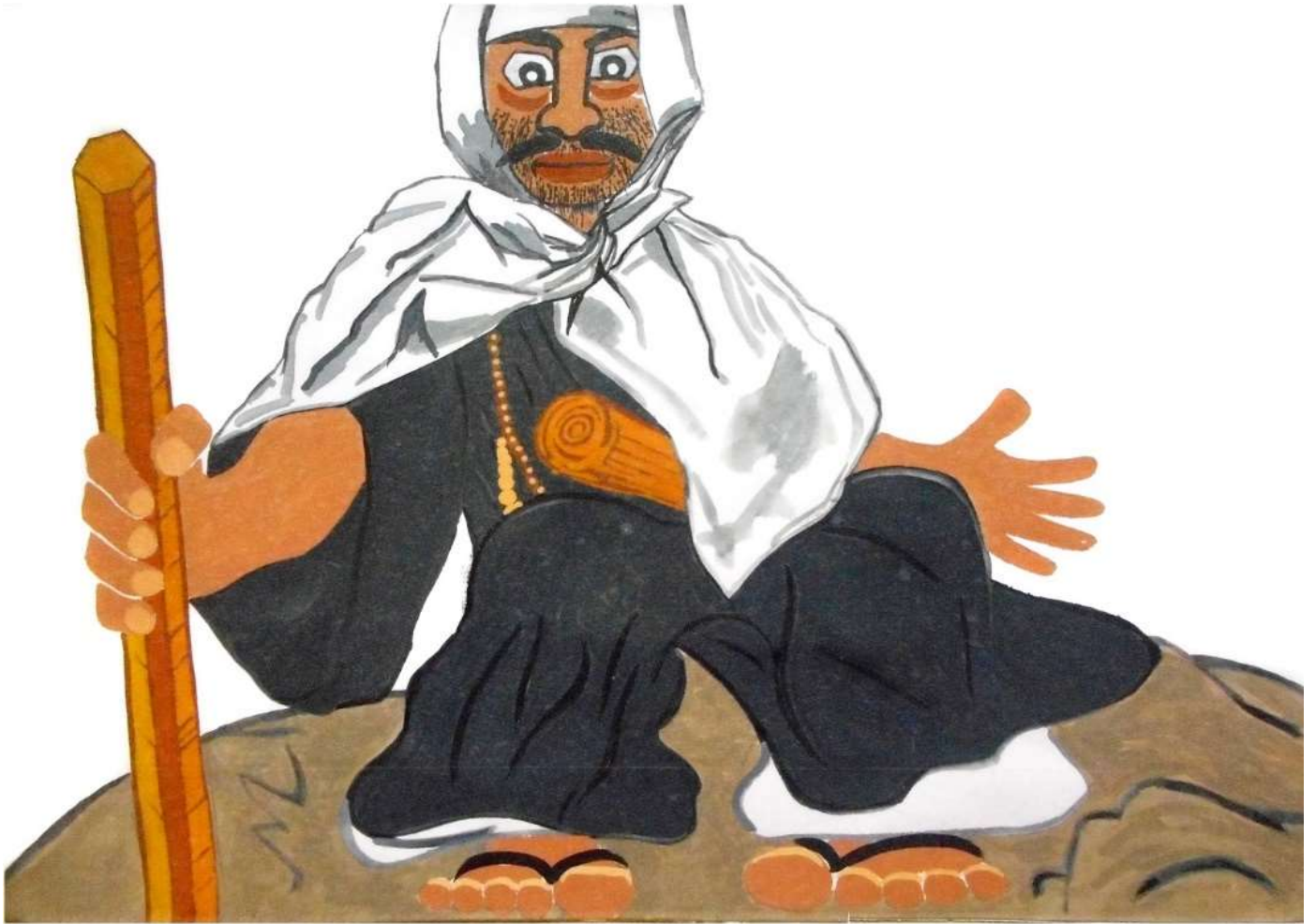


むかしむかし、三和の津々屋（※廿屋）村に、

野良仕事を終え、牛や馬の

餌になる野草を背負った重吉じいさんが、夕暮

れの道をとぼとぼと、家路を急いでいた。



ふと道端みちばたに目めをやると、一人ひとりの修行中しゆぎようちゆうの坊主ぼうずにも見える、いかにもいかめしい顔かおをした、大男おおおとこが岩いわに腰こしかけて休やすんでいるのが見えた。

手てには太ふとくて長ながい六角棒ろっかくぼうを持もっている。重吉しげきちじいさんは、ニコニコしながら、おじぎをして大男おおおとこの前まえを通とおりかかろうとすると、突然とつぜん、大きな声こゑで

大男おおおとこ 「おやじ、ここはどこじゃー？」

と聞いてきました。

重吉しげきちじいさんは、めずらしそうに大男おおおとこをしげしげと眺ながめながら、

重吉しげきちじいさん 「ここは美濃みのの国くにで、津々屋村つづや

でござる。

お前まへさんは、どこからおいで

なされた。」

と、丁寧ていねいに答こたえた。大男おおおとこは笑わらいながら大きな手てを振りかざして、



大男おおおとこ

「俺おれは、こちらから来たから、

あちらへ行くのじゃー！」

おやじ、俺おれはここまで岩いわ二個を

背負せおってきたが、日暮ひぐれになった

し、くたびれたのでここに置おいてい

く、邪魔じやまになったらどこかへやってくれ！

さあ、置おいていくぞ！

ワハハハハ！」

と言って、重吉しげきちじいさんの前まえを走はしる様ようにしてどん

どん下くだっていった。

さて、重吉しげきちじいさんは、びっくりしてしまった。

なぜなら、修行中しゆぎちゆうちゆうの坊主ぼうずらしきその大男おおおとこが背負せおつ

てきたという二個にこの「岩いわ」は、よく見ると、見上みあ

げるほど大きな岩いわだったのだ。



重吉じいさんは家へ急いで帰り、待っていた子どもたちにもたちに、いま見て来た大男のことを面白おかしく話してやった。

重吉じいさん 「わしは、この齢になるまであんな見上げる

程の大男を見たことがない。顔中髭だらけ、

大きな目がギョロギョロと光かっとなった。

自分で背負ってきたと言う、岩に腰かけて

休んどったが、頭には頭巾をかぶって、

汚れた衣を着とった。」

「岩なんか、背負ってきとったんか？」

子ども

「そうや、見あげるほどの大きな岩やった。

ほんで、腰には丸太のような刀を差して、

手には六角棒を持つとって、丁度弁慶のよ

うな格好やった。わしが来ると腰かけとつ

た岩を指さして、この岩をやるぞと言っ

て、飛ぶようにどこかへ行きよった。

その足の速いこと速いこと。

びっくり仰天！」



子どもたちは面白そうに聞いていたが、あくろ朝、みなを誘って、その岩のある所まで見に行き、あまりの大きさに驚いた。

子ども達 「きつとその大男は弁慶や、弁慶は

二百人力やから、この岩を背負つ

てこれたんや。」

と、みんなに得意そうに聞いた話を言いふらして歩いたものだから、あつという間に村中に広まった。そのうち、この岩を「弁慶岩」と言うようになった。

今から何百年も昔、弁慶と牛若丸が活躍したころの話と言われている。

この岩は、昭和四十二年頃まで二個あったが、道路改修の時、一個は壊されてしまい、現在は一個しか残っていない。

下廿屋古老の話より

ひらきやま だいじや

平木山の大蛇



三和のむかし話

むかしむかし、三和の上川浦かみかわうらにある、美しい平木の山ひらきに大蛇だいじやが住んでいました。大蛇は、平木の愛宕さまあたごにお仕えし、雲くもを呼び出して、大雨・小雨おおあめ ことあめ、どんな雨でも自由じゆうに降ふらせる不思議ふしぎな力を授さずかっていました。村人たちは、雨が降ふると、

村人1 「ええお湿りしめやなも。」

村人2 「ほんに、ええあんばいや。」

村人3 「これで種蒔たねまきもできるなも。」

と言って、豊作ほうさくを願めぐって恵みの雨あめに喜よろこんでいました。



ところが、大蛇は雨を降らせることが、だんだん面白
くなくなってきました。そしてある日、愛宕さまのお許もな
いのに、かってに大雨を降らせてしまったのです。川
浦川の水は、ぐんぐん増えてゆきました。

村人1 「こりやいかん！家ん中にまで水が入って

きとる！逃げないかん！」

村人2 「何やつとるんや！早よ逃げよ！ものすごい

勢いで、水が押し寄せてきとる！」

口々に叫びながら、村人たちは雨の中を山の方へ走りま
した。

ゴウゴウと音を立てる魔物のような川の水は、家々を
あつという間に押し流し、田畑を飲み込みました。

村人3 「ああ、わたらの家が…畑まで…」

命からがら逃げるのができた、村人たちは悲しみの
どん底に落とされてしまいました。



これをご覧らんになった愛宕さまは、大蛇だいじゃを大層お叱しかりになり、雨あめを降ふらせる力ちからを取り上げてしまいました。そして罰ばつとして大蛇だいじゃを平木ひらきの山ふうに封こじ込んでしまわれたのです。村人たちは、平和な月日へいわ つきひを送おくれるようになりました。

ところが、ある晩ばんのこと、村人たちが寝ねようとしたその時とき、平木ひらきの山辺やまあたりからゴウゴウという物凄ものすごいい音が聞きこえられました。ぐらぐらと家が揺ゆれはじめ、村人たちは、恐おそろしくて布団ふとんの中で息いきをひそめていました。



少したつて静けさが戻り、カラッと晴れた良い天気の日になりました。村人たちは集まっていました。

村人1 「すごい揺れやった。大丈夫やったか？」

村人2 「平木の山の方からすごい音がしとつたな。」

村人3 「あっ！あんなところに穴があいとるぞ！」

村人1 「ありや、ほんとや。昨日の揺れのせいかもしれん。」

村人2 「ちょっと見に行ってみるか？」

さっそく怖いもの見たさで、こぞつて穴を見に行きました。

平木の山の真ん中辺りに、ぽっかりあいた大きな穴が開いていました。村人たちは穴を覗き込みました。大きな

穴の中には、ちょうど朝日が差し込んでいました。隅

には一筋の水が流れていて、天井には大蛇の走ったウロ

コの跡がはっきり見えました。



村人3 「大蛇が逃げだしたんや！」

村人1 「どうするんや！また大雨が降るかもしれんぞ！」

村人たちは相談して洞窟の上に八幡さまをお祀りし、お神酒をお供えしました。それからというものの豊作の年が続き、大蛇のことを村人たちは次第に忘れていきました。

いつの頃からか、八月十五日に八幡さまのお祭りが行われるようになり、村人が双子の椿の下に集まり手作りの御馳走の自慢をしながら一日を楽しみました。

おしまい。

かわうらいちろうじん
川浦一老人の話より

やうつやうつき

ハツ八月の

ばち

かけすり鉢



むかしむかし、三和の村に、神・仏を信じている孫蔵
というじいさまが、住んでおったと。

むかしは雨が降らなければ雨乞いをして、大風が吹け
ばお宮さまへ参って、無事を祈っていました。大事な願
い事がある時は、百回もお参りしたり、一週間もお宮さ
まに寝泊まりしたりして、神様にお祈りをしたもので
す。



さて、孫蔵まごぞうじいさんには、男の子二人に女の子一人が
いました。娘むすめはたいそう美しく、年としごろになった頃、
尾張おわり（※現在の名古屋付近）のあるお金持かねもちに、めでた
くお嫁よめに行きました。それからというもの、孫蔵まごぞうじいさ
んは毎日まいにちのように早く孫まごの顔かおが見たいと願ねがっていました
たが、どうしたものか、四年経たっても孫まごが無事ぶじに生まれ
たという知しらせは届とどきませんでした。



孫蔵

「こりや、お宮さまに “おこもり” して、
お願いせにやいかん。」

孫蔵じいさんは、娘が嫁いだから五年目の冬、師走の十五日、今度こそ無事に生まれるようにと、一週間、お祈りをするために、お宮さまに寝泊まりを始めました。

火の気一つない静かな拝殿はとても寒く、吐く息は白くなり、体は震えました。けれど、毎晩毎晩、気を張り詰めてお祈りをしたのです。そして、最後の七日目の晩は、雪が降って風も強く、特に寒さがひどい夜でした。孫蔵じいさんはもう、くたくたでした。でも、夜遅くまでお祈りをして、一枚の薄い布団に、寒さに震えながらくるまっていると、いつの間にか、うとうとしはじめました。



どれほど経たったことでしょう。かすかな物音ものおとに孫蔵まごぞうじいさんは、ふと眼めをさしました。誰もだれいないはずの、お堂どうの扉とびらがひとりひらでに開ひらき、中なかから誰だれかの話はなし声こゑが聞きこえてくるのです。

かみさま
神様

「見て参まれ。」

ひげ ろうじん
白い髭ひげの老人

「はい。それでは見まて参まります。」

ひげ は ろうじん はくば の どこ と
白い髭ひげを生はやした老人ろうじんが、白馬はくばに乗のって何処どこともなく飛とび出だして行いきました。孫蔵まごぞうじいさんはびっくりして、起お

あが なにももの おさ
き上あろうとしましたが、何者なにもものかに押おえられているかのよ
うに、動うごくことも、声こゑを出だすこともできなくなっていま
した。

まごぞう
孫蔵

「どうなつとるんや、体からだが動うごかん…。」

よ ふ
こんな夜更よふけに、いつたいなんや…。」



くらやみ 暗闇に消えた白馬と老人を見てからどれだけたった

のか、遠くの方から馬の足音が聞えてきました。そして、
またお堂の扉が開く音がしたと思ったら、先ほどの老人
が帰って来ました。

かみさま 神様 「どうであつた。」

ひげ 白い髭の老人 「はい。「ハツ八月のかけすり鉢」に
「ございます。」

ふたた 再び、扉の閉る音がすると、辺りは元の静けさを取り
戻しました。そして、途端に今まで動くこともできな
かった体が動くようになっていたのです。

まごぞう 孫蔵 「不思議なこともあるもんや。」

あれはなんやったんや…。」



孫藏じいさんは、朝日が昇るのを待って、家へ帰りま
した。そしてその日、ついに子どもが無事に生まれたと
いう便りが届きました。孫藏じいさんは踊り上って喜び
ました。生まれた子は、母親によく似て、美しく可愛
い女の子でした。年に一度は必ず里へきて、孫藏じい
さんを喜ばせてくれました。

しかし、女の子が八才の八月十五日夕方から急に熱を
出し、苦しみ出しました。医者呼び、手をつくして看病
しましたが、どうしたことか、とうとう亡くなってしまう
しました。



まごぞう
孫藏じいさんが、不思議な体験をしてからちようど

はっかげつめ こと
八年と八ヶ月目の事でした。

やっつ やつき
―「ハツ八月のかけすり鉢」―

じゅみょう かみ
人の寿命は神さまだけが知っている、世にも不思議な

お告げであつたのかもしれない。

ぼち かたち か
かけすり鉢とは、形の欠けたすり鉢の事です。

おしまい。

ごとうけだいたい でんぶん
後藤家代々の伝聞より

ごしんざん

ひめさま

御殿山のお姫様



遠く、はるかな昔。人と神がつながっていた頃のお話。

三和の村では、日照りが続くかと思えば、大雨が何日も続き、作物は取れず、さらには地震まで起きて、村人はつらく苦しい暮らしをしておったと。

村人1 「どうしたらええんや…。食べるもんも、住むところも、めちやくちやや。

このままやと、村はおしまいや！」

村人2 「天は、わしらを見捨ててしまったんか…。」

村人3 「ここらで、一番高い山は、「御殿山」や。

そこで祈り続けとったら、天に届くかもしれん。」



そこで、村人たちは、「御殿山」に登り、天に向かつて祈ることにしました。そして、何日も祈り続けたある日、加賀の国（今の石川県）、白山からたいそう美しいお姫さまが白雲に乗り、二匹の大蛇を従えてやってきました。お姫さまが「御殿山」の頂上に降り立つと、いつの間にか御殿があらわれました。お姫さまは三和の村を一望すると、たいそう気に入られ、村を見守ることにしました。村人たちは、たいそうよろこび、「白山神社」を建て、毎日お供え物を持ってお参りに行きました。



お姫さまは、日照りが続けば「ひさし岩」と「障子岩」の谷間から、けして涸れることのない、きれいな水をこんこんと湧き出させました。村に病が出たときは、この水を病人に飲ませると、どんな病もたちどころに治りました。

村人1 「御神水」のおかげやなあ。」

村人2 「ありがたや。これもみな、姫さまのおかげや。」

村人達はみな、お姫さまに感謝し、平和な暮らしが続きました。お姫さまも三和の山や川、人々、動物たちが大好きでした。夏の暑い日の夜には涼しい風をもとめて「すずみ壇」へ行き、そこから村をながめました。

しかし、永いながい月日が流れ、お姫さまは、ふさぎ込むことが多くなってきました。村人たちは、お姫さまのもとを訪れることもなくなり、恵みの雨が降っても、作物がたくさん取れても、天に感謝する事がなくなってきましたのです。村人の心の中から、お姫さまはだんだん消えていきました。



その頃、「天吹山」の東側、御殿の見える「猿の岩」

で、たくさんの猿たちが集まって話をしていました。この場所は、いつもお姫さまと遊んでいた場所で、猿や動物たちは姫さまと仲良しです。

猿1 「姫さま、元気がないね…。」

猿2 「今年も、作物がたくさん実ったのに、姫さま

のところに來る者はおらん。」

猿3 「姫さまのおかげなのに…。」

猿4 「今日も誰も來ないね…。」

そんな猿たちの心配は、みるみるうちに、他の動物たちにも広がりました。作物の収穫も終わった秋の満月のこと、国中からお姫さまを心配した、きつね、うさぎ、たぬき、くま、しか、いのししなど、たくさんの動物たちが「すずみ壇」に集まりました。

動物たち「姫さま、元氣出して！」

その夜は、みんなで踊って姫さまを楽しませました。



そんなある日、村人が畑仕事をしていると、猿たちが

やってきて、畑の作物を少しばかり取っていきました。

動物たちは、お姫さまを思うと我慢できなくなったのです。

猿1 「たくさん実ったのに、姫さまにお供え物も

なしとは…。」

猿2 「少しばかりいただいて、姫さまに持っていくよう！」

しかし、それを見た村人は、動物たちを追い回すよう

になったのです。動物たちとの争いは、少しずつ広がっ

ていきました。

そんな村人と動物たちを見たお姫さまは、とうとう泣

き出してしまいました。何日も何日も泣き止むことはな

く、その涙は、大雨となって村に降りそそぎました。

しまいには、川があふれ始め、村では大騒ぎです。



そのとき、いつもは「うつぬけの岩」から静かに見守
つていたお供の大蛇がお告げを出すことにしました。

大蛇 「日々の暮らしに感謝し、天に祈りなさい。」

村人の夢の中に出ては、お告げを繰り返しました。

村人1 「最近、夢に大きな蛇が出てきて、何か言っ
とるんや。」

村人2 「おまえさんもか。この大雨となんか関係あるか
もしれんな…。」

村人3 「なんか、感謝しないかんとかなんとか。」

村人2 「もしかして…。」

村人たちは、話し合いました。そして、それぞれに天に
祈ってみたのです。しかし、大雨がやむことはありません
でした。



村人1 「どうしたらいいのや。」

悩なやんでいるところに、爺じいさま様がぽつりと言いいました。

爺じいさま様 「昔むかしは、「御殿山ごてんざん」の山頂さんちようで、みんなして祈いのつ

たもんや。その年としにとれたもんを持って、

「紅岩べにいわ」とこの「御手洗水みたらいみず」で身みを清きよめて、

祈いのりに行いったんや…。」

村人たちは、顔みあを見合あわせました。そして、長ながい間あいだ忘わすれていた「御殿山ごてんざん」に登のぼることにしたのです。

村人3 「ほんとにこれで、何なんとかなるもんなんか…。」

村人たちは、「御殿山ごてんざん」の神社じんじやに向むかい、お供そなえをして何日なんにちも祈いのりました。すると、大雨おおあめは収おさまり、村むらには陽ひの光ひかりがさしはじめました。

村人1 「御殿山ごてんざんのお姫ひめさま」の話はなしは本当ほんとうやったんか…。」

村人2 「みんな、大事だいじなことを忘わすれとつたんや…。」

それからというもの、村人たちは、お姫ひめさまを忘わすれることなく、「御殿山ごてんざん」へ登のぼるようになりました。現在げんざいでも6月むつにお祭まつりが行まわられています。

ブンズルさま

ベンズルさま

三和のむかし話



むかしむかし、甘屋村つじやの村人達たちが薬師堂やくしじやうあたりの掃除そうじをするついでに、木像もくざうの「仏さま」ほとけもきれいにしてやろうということになった。



そこで村人のが、薬師川へ投げ入れて洗おうとする
と、青かった空はいつきに曇りはじめ、雷とともに
大雨がザアザアと降りだした。

村人 「なんや、きゆうに雨が降ってきよった！」

村人 「もしかしたら、川で洗ったのが、いかんかつ

たのか？」

村人たちは、びっくりして「仏さま」を川から引き上げ、お祈りをして、謝った。すると、先ほどの大雨とはうって変わって、青空がもどってきたので、またびっくり。



また、ある年のこと、毎日大日照りが続いて田畑の作物は枯れ、野山の草木も枯れそうになり、村人たちは困りはてた。

村人 「こりやいかん。こうも、続くと埒かんぞ！」

なんとかせな…。」

村人 「そんなら、あの「仏さま」を川に投げ込んでみたらどうや？」

で行き、川に投げ込んで、傘踊りを踊り、雨乞いをしたところ、たちまち大雨になり村人達はやっと一安心。

この出来事が隣の村々にも伝わると、日照りの続いた年などは山之上や蜂屋などの村から、たくさんの人が雨乞いのために、三和の村へ訪れるようになった。



つき日はながれ、雨乞いのお参りに来ていた隣村の
ひとびと
人々を見た、村の若い衆が「仏さま」の話をし始めた。

若い衆 「「仏さま」の話は本当やと思うか？」

若い衆 「なんや、信じとらんのか？」

若い衆 「そもそも簡単に、雨が降ったり止んだり

するもんか？」

若い衆 「ほんなら、ウソかホントかためしてみよまい！」

若者達はお堂に忍び込み、力自慢をしながら「仏さま

をお面白半分おもしろはんぶんに川へ投げ入れた。



すると、たちまち大雨おおあめとなって、あつという間まに川の水があふれはじめてしまい、あわてて今度こんどは「仏さま」に謝あやまった。

こうして、度々たびたび若い衆しゅうが、木でできた「仏さま」を川に投げ込んだり、さらには、村人たちが、願ねがい事ごとをしながら仏さまを撫なでるものだから、今いまでは顔かおが「ノツペラボウ」になってしまった。おまけに、毎まい回かい大雨おおあめが降ふつて大騒おおさわぎになるので、いっそ誰だれれも手てのとどかない所ところへお祀まつりしようということになった。

いつの頃ころからか、この「仏さま」は「ベンズルさま」と呼よばれるようになり、甘屋つづや神社じんじやのお社やしろの中へおさめられている。

なかつづや しばたし
中甘屋 柴田氏の話より

かぶと
渕

ぶち



三和村の上川浦には、一度足を踏み入れた者は、二度と出る事ができないと恐れられている「納古山」という山があり、そこに流れる川に「かぶと淵」と呼ばれる淵がありました。流れる川の底から、こんこんと水がわき出ている、吸い込まれるような美しさです。この淵には不思議なものが宿っているという言い伝えがありました。



時は一一八四年、平安時代の終わりのころ。京の都で「朝日将軍」とうたわれていた木曾義仲は、京の宇治川で源頼朝の弟、源義経と、大きな戦を繰り広げていました。しかし、この戦いで負けてしまい、義仲とつながりのある、生き残った若君と、その供の者たちは、各地に逃げのびる事となったのです。

若君と供の者たちは、火の明かりにも、風の音にも注意して逃げ続けていました。しかし、追っ手から逃げるうちに、山の奥深くに迷い込んでしまったのです。



わかぎみ

「いったいここは、どこであろうか？あれから

何日たったのか…。」

わかぎみ

と 若君の問いに答えられるものは誰もいませんでした。満足

に休むことも食べることもできず、みな疲れ果てておりました。

そんな時、遠くの方からかすかに水の流れる音が聞こえ

はじめたのです。

とも

もの 「近くに川があるぞ！」

とも

ひとり 供の一人が力を振りしぼって崖を登り、先へ行くと、

とも

もの 「あつた！やはり川じゃ！水じゃ！」

その声を聞いたみな、喜びの声を上げ、後に続いていきました。

わかぎみ

若君 「うまい！なんとうまい水か！」

とも

もの 供の者 「こんなうまい水は、飲んだことがない！」

もう何日も水すら飲んでいなかったもので、みなガブガブ

と飲み始めました。不思議なことに涸の周りは温かく、そ

の水は、一くち飲むと体中が潤い、二くち飲むと心が穏

やかに、三くち飲むと、あんなに注意していた追っ手のこ

とも忘れ、みな眠り込んでしまいました。



しばらくして、若君は目を覚ますと、とても不思議な気分でした。

若君 「みなの方、よく聞いてくれ！今より、武士をやめる！

これは、この場でこうしてくれる！」

そう言って、持っていた武士の証でもある刀や兜を淵に投げ込んでしまったのです。供の方たちは、急なことにびっくりして、

供の方 「若君、どうなされたのか？！」

若君 「もう戦をしようとは思わん。争い事はたくさんじゃ。

百姓となって、静かに暮らそうではないか！」

若君の言葉に、供の方たちも従いました。みな戦をしたことは、思わなかったのです。その時、淵は輝いているようにも、何かが動いたようにも見えました。

若君たちは、山を降り、村人を訪ねることにしました。突然現れた若君たちを村人たちは、温かく迎え入れてくれました。そうして、川浦の村で百姓として家を造り、村人たちと野良仕事をして、平和な暮らしを送るようになったのです。



ある日のこと、山へ獵りように出ている村人たちが山の奥へ迷い込んで途方とほうに暮くれていると、川かわに出てきました。不思議ふしぎに温あたたかく、飲むのと力の湧わいてくる水に、

村人 「おお！もしや、あの、お侍さむらいさま方が言うて

おった湧ふちやないか？」

村人 「兜かぶとや刀かたなをこの湧ふちに捨ててきたと言うとつたが…。

大事だいじなものや、どれ、ちよつと探さがしてみよまいか？」

湧ふちの水を減みずらし探さがしてみると、兜かぶとのかわりに、大きな鰻うなぎが出てきました。

村人 「出てこんなあ…。それにしても、大きな鰻うなぎやなも。」

村人はあきらめて、水みずを元もとに戻もどすことにしました。そのとたん、大雨おおあめが降り始めたのです。湧ふちの水を減みずらすと必ず大雨おおあめを降ふらせたので、雨乞あまごいの湧ふちとして村人たちがシメ縄なわをはりめぐらせて、お祀まつりしました。のちにこの湧ふちは「かぶと湧ふち」と呼ばれるようになりました。

その後ご、若君わかぎみは、庄屋夫婦しやうやふうふの一人娘ひとりむすめのツルと夫婦めおととなり、幸兵衛ゆきべえと名なを改めて庄屋しやうやさんの家いえを継つぐことになりました。それからこの地ちには木曾源氏きそげんじ「朝日将軍あさひしょうぐん」の血ちが代々だいたい続つづいているといわれています。

おしまい。

ひらの つぐじし はなし
平野 二二氏の話より

たるがやま　みろく

樽ヶ山の弥勒さま

三和のむかし話

樽ヶ山の弥勒さま

むかしむかし、下川浦の川沿いにある竹やぶに、誰が造ったかわからない、石でできた「弥勒さま」がありましたと。

あるとき、長い間重い病で寝たきりの、重吉という人の夢に、「弥勒さま」があらわれました。

弥勒さま 「今いるところは、暗く荒れ果てて、誰ひとり訪れる者がいない。さびしく、悲しい。

私は、村を見渡せるところへ行きたい。

願いを叶えるならば、村の幸せを約束しよう。」

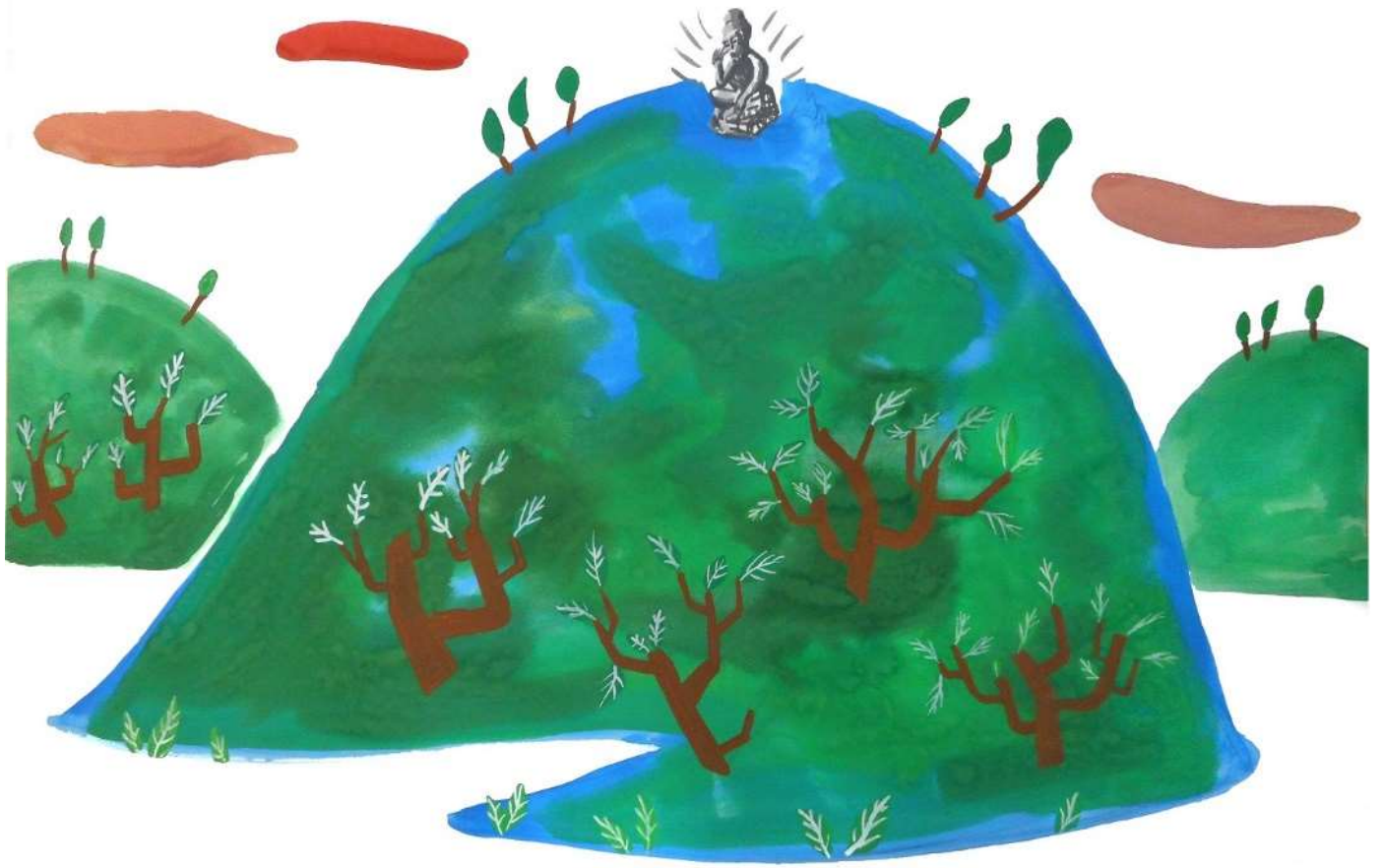
そう言って、重吉が返事をする間もなく、静かに消えていったのです。

あくる朝、重吉は、この弥勒さまの不思議な夢を家の者に伝え、家の者は、村の者たちに話しました。

村人1 「ほーか、そら、「弥勒さま」のお告げやな。」

村人2 「そんなら、いっそのこと、樽ヶ山のとっぺんなんかはどうや？」

よー村が見わたせるに。」



そこで、村人たちは、険しい裏山の樽ヶ山に、何日も
かかって道を造り、頂上に「弥勒さま」をお祀りしま
した。すると不思議なことに、重吉の病は良くなって、
山に登り、「弥勒さま」にお礼参りができるようになっ
たのです。

それから月日がたったある日、村を通りがかった旅人
が、「弥勒さま」を拝もうと、樽ヶ山に登ることにしま
した。そこで、持っていた杖を「弥勒さま」に預け、ち
よつと用事をすませに行ったのですが、戻って来てみる
と、杖がなくなっていたのです。おこった旅人が腹いせ
に、近くにあった木の棒で叩くと、なんと、片手が欠け
てしまいました。それに驚いた村人は、「弥勒さま」を
樽ヶ山の頂上から降ろすことにしたのです。



さらに年月おんげつが流れ、村には、ある噂うわさが流れていました。

片手かたての「弥勒みろくさま」が、柔らかい光に包まれ、夜の真まつ暗くら

な闇やみの中、迷まようことなく樽ヶ山たるがやまを登のぼって行くのが見える

というのです。それを見た村人は、この世よのものとは思

えぬ「弥勒みろくさま」のお姿すがたに、手あを合あわせるのでした。

村人1 「夕ゆんべ、見たんや！ありや、「弥勒みろくさま」やった！」

村人2 「おんしもか、なんや日西洞ひさいほらからやと、

夜よな夜よな、よー見えちよるらしいで。」

村人3 「やけど、なんで山のぼなんか登のぼりんさるんや？」

村人1 「昔たは、樽ヶ山たるがやまのてっぺんまつにお祀まつりしてござって、

高たかいところから眺ながめて、わっちんたを見とつ

てくだれとつたんやと。」

村人3 「手てが取とれてまつとるのに、そんでも、高たか

ところから見てくだれようとされとるんか…。

そら、ありがたいことやなも…。」

村人2 「そんならまた、もとん所ところにお祀まつりしたらどうや？

「弥勒みろくさま」も、喜よろこんでくださるに。」



そうして、「弥勒さま」は、樽ヶ山の頂上に再び祀られることとなりました。すると、今までよく起きていた、村のボヤ騒ぎも、ふつりと消えて、平和な暮らしが訪れました。

そのためいつしか、この「弥勒さま」を火の守り仏と
いうようになりました。

以来、片手のままで村人を災いから守ってくださいるので、毎年一月十五日には、お餅を供えてお祀りするよ
うになりましたと。

おしまい。

酒向 保一氏
酒向 久夫氏 より

三和のむかし話

～ あとがき ～

紙芝居を作成することになったきっかけは、三和小学校の校長先生の提案が始まりでした。

2015年からスタートし、文章の編集を、三和小校長先生、北部分室ボランティア（ほたるん）のみなさん、学校司書の先生、図書館で行い、紙芝居の絵を校長先生が描かれました。

10作品を目標に、紙芝居作りを進め、今回、完成させることができました。もしかすると、まだ増えるかもしれませんが、紙芝居マップを作成するなど、計画もあります。

「住んでいる地域の昔話や伝説を、子どもたちに、語り継いでほしい。」そんな思いで作られた紙芝居です。方言に力を入れた作品、伝説の地が実際に残っている作品など、それぞれの作品に特色があります。多くの方に、読んで、見ていただくと幸いです。

多くの方のみなさんの協力、ありがとうございました。

【参考文献】

- 『故里の伝記』（社会教育協議会三和支部 // 編）
- 『三和の伝説』（荘加 一郎 // 著）
- 『みのかもの伝説』（美濃加茂市 美濃加茂市市立図書館）
- 『郷土の昔ばなし』（美濃加茂郵便局 // 編）
- 『美濃加茂市史 民俗編』（美濃加茂市）
- 『やっぱ 岐阜弁やて!』（松尾 一 // 著 まつお出版）
- 『ふるさとの方言集 美濃・中濃地方篇』（井戸 喜男 // 著）

三和郷土紙芝居

2017年3月21日 発行

編集 三和小学校 校長
学校司書
北部分室ボランティア ほたるん
美濃加茂市中央図書館（北部分室）

作画 三和小学校 校長

発行 美濃加茂市中央図書館
〒505-0041 美濃加茂市太田町1921-1 Tel0574-25-7316

※ ご自由にご利用ください。ただし、文章内容の変更・絵の無断加工を禁じます。

～ 紙芝居作成の記録 ～



←できた紙芝居を発表！
2016年3月 三和小学校体育館にて



いきいきサロンで→
三和小生徒さんが発表
2017年3月 三和交流センター



←紙芝居伝説の地へ！
御殿山に登ってみました！
2016年11月



↑紙芝居作成風景！
2017年3月

みなさん、お疲れ様です！
ありがとうございました！

